

(株) 間組 正会員 中内 博司
 “ 石川 昭

1. まえがき

従来スリップフォーム工法が用いられる構造物は、たとえば橋脚、煙突、サイロ、立坑の巻立てなどの施工にみられるように、鉛直性の構造物にかぎられている。ここに紹介する例は、ダム取水口設備として傾斜角40度をもつ急斜面におけるRC構造物をスリップフォーム工法によって構築した施工例である。

2. 型枠設備

本工事は傾斜角40度をもち、しかも図-1に示すような複雑な断面形状をもつRC構造物の施工ということで、型枠の設計、ジャッキシステム、ロッドの取付けおよびその固定方法などについて詳細な検討を行った。基本システムは、写真-1に示すように、構造物の頂部位置に反打桁を設け、ここから斜め下方へロッドを下げ、このロッドを引張材としてジャッキ（能力6トン）16基が型枠とともに上昇する方式を採用した。

型枠にはメタルフォーム（ $900^{mm} \times 1800^{mm}$ ）を使用し、型枠に作用する側圧に抵抗させるためにH形鋼（H-100x100）を主材とするフレームを腹起しとしてこれに固定した。また、躯体精度を向上させるため、型枠の変形防止には特に注意を払った。両側壁型枠の左右方向への変形を防止するためあらかじめ地山にガイドレール（I-300x300）を固定し、これをフレームに固定したローラが支持上昇する装置を設けた。さらに、型枠の鉛直方向へのこびを防止するため、側壁頂部および底部に、硬化コンクリート面に沿って回転するローラをそれぞれ2基取付けた。

ジャッキシステムについては、ロッドをコンクリート中に埋め込み、このロッドを圧縮材として上昇する方式は、仮設費の点から経済的といえるが、本工事における断面形状が複雑で、コンクリートの打設にあたってジャッキシステムがその障害となること、ロッドの継ぎしが困難であることからロッドをあらかじめセットしておき、引張材として利用する方式をとった。ジャッキの配置に関しては単純に型枠面積からその配置を決定せず、隅角部の抵抗が通常小さくなることを考慮して配置した。

ジャッキが上昇する際にその引張力を伝達するロッドを傾斜した状

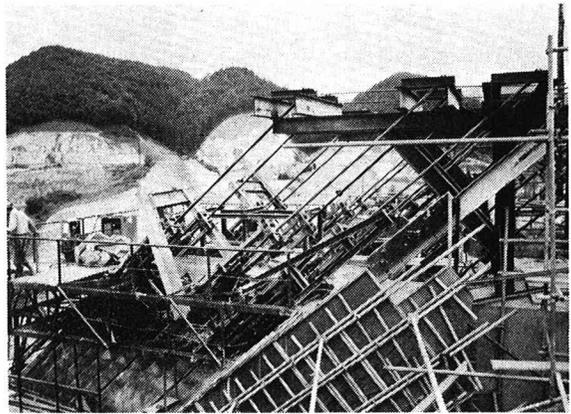


写真-1 型枠設備

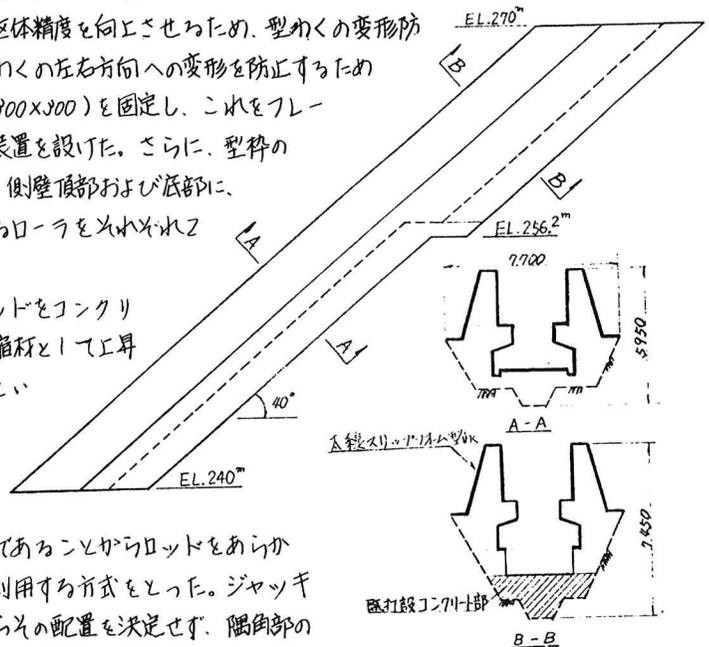


図-1 構造物形状

